



田布施町郷土館の歩み

田布施町郷土館
館長 林 芙美夫

田布施町郷土館条例の制定をみたのは、平成元年9月20日であった。そして、同年11月3日に町民待望の郷土館がオープンしたのである。初代館長松岡輝彦氏の御苦勞は、察するにあまり有るものがあったであろう。

当時の常設展示は、岸信介・佐藤栄作兄弟宰相をはじめとする当町ゆかりの著名な人物の遺品及び資料、そして町域の古墳から出土した埋蔵文化財であった。

当時、私は民間会社に勤務していたが、平成3年退職と同時に縁あって郷土館に勤務することになった。以後、「愛される郷土館、特色ある郷土館」をモットーとして努めてきたところである。今春、山口県博物館協会から永年勤続表彰を受けたこともあり、編集部からのおさそいもいただいたので館の歩みの一端を次に述べその責を果すこととしたい。

*企画展・テーマ展等の開催

多目的ホールを活用して館蔵品展「宰相岸信介展」、同「宰相佐藤栄作展」、柳井・平生・田布施周辺の出土品を展示した「よみがえる古代展」は会期中に史跡探訪、土器造り体験学習会を併催して好評を博した。また、郷土が生んだ田園俳人江良碧松翁を中心とする「層雲 周防の三羽がらす展」、発掘調査の成果を公開する「熊毛王国最後の前方後円墳 納蔵原古墳展」「ふるさと絵葉書・切手展」「教育史資料展 寺子屋から六・三制まで」「ふるさと陶芸展」「小行司のギフチョウ展」や趣味の会が主催される山野草展、フランス刺繍展、書道展なども好評であった。

平成13年1月、従来の多目的ホールに民俗資料展示室を開設したことから、総合学習で訪れる小中校生は増加したが、大々的な展示会場を失ったため全体的には来館者数は減少している。6年から毎年開催してきた「歴史講座」も、残念ながら閉講せざるを得なくなった。



佐藤栄作宰相

岸 信介宰相



民俗資料展示室

*調査・研究・刊行活動

平成6年から郷土に関する調査・研究の成果を郷土館叢書として刊行している。第1集『田布施金石文集』(林編)、第2集『田布施時代の国木田独歩』(林著)、第3集『自由律俳人江良碧松』(久光良一著)、第4集『田布施地方の口承文芸、民話・民謡・ことわざ』(林著)、第5集『ふるさとの2000年田布施町文化史年表』(林編)、第6集『写真集田布施町の今昔』(林編)、第7集『富永有隣伝』(林編)がある。

平成3年に「郷土館だより」、翌年から「田布施町郷土館年報」、9年に俳句の英訳版「虹の懸け橋」を発行してきたところであるが、これに加えて研究論文、史料紹介などを収録し、12年から『田布施町郷土館研究紀要』として体裁、内容ともに一新した。また、13年には別冊として『岸信介幽窗の詩歌集 耐雪』を刊行している。

*文書館的機能の付加

古文書類の調査・収集を行い、地方史に関わる史資料の保存、充実を図るよう努めている。平成7年には、田布施町行政文書1,314点を整理し、その目録を作成した。なお、スペースの問題で収蔵するには至っていない。

*田布施町郷土館友の会

平成11年、同志を募って田布施町郷土館友の会(ボランティア集団)をつくり、主な事業として同年大崩遺跡遺構確認調査、翌年木地遺跡遺構確認調査を実施するなど多くの成果を挙げた。今年度も納蔵原第2号墳の遺構確認調査を予定しているところである。

*その他

平成4年から、案内業務の一環として現地案内サービスを行い、来館者から喜ばれている。スタッフが館長1人、パート1人であるため勤務変更を伴う場合が多く、1週間前までに申し込んでいただくことにしている。

平成12年度末の収蔵品点数は、考古資料1,633、民俗資料560、歴史資料4,421、内岸信介関係1,802、佐藤栄作関係425、ゆかりの人物関係529である。常設展示品の充実はいうにおよばず、小展示室を利用したの特別展等を企画し、その公開活用を図っていきたい。

なお、インターネット導入については、現在準備段階にある。



田布施町紹介室



埋蔵文化財展示室



墓碑銘に見た思い

東行記念館

副館長・学芸員 一 坂 太 郎

早いもので平成二年に東行記念館に奉職し、十一年余りの時間が流れた。当時はまだバブル経済のさ中で、東京から山口県の片田舎に就職したことを珍らしがったマスコミから、取材を相次いで受けて戸惑ったことなど、思い出す。

東行記念館は昭和四十一年（一九六六）四月、高杉晋作（東行）の百年祭記念事業として建てられた。創設者で、初代館長だった谷玉仙東行庵主は、平成元年十月に亡くなっていた。館には成文化された運営方針のようなものは見当たらず、私は谷館長が残された言動から、それらを探ることになった。

谷館長は晋作百五年祭の際、晋作墓所の傍らを造成し、「奇兵隊および諸隊士顕彰墓地」を開いている。維新で戦い、亡くなった兵士たちの多くは十代、二十代の青年であり、子孫の無い彼らの墓碑の多くは、無縁として荒れ果てるケースが多かったという。そこで谷館長は主に山口県内各地から墓碑を集め、手厚く祭った。その数は、現在、約百三十基。さまざまな事件や戦争の関係者の墓だ。中には諸隊の反乱事件である「脱隊騒動」首謀者たちの墓もあり、いまや一種の「野外博物館」にもなっている。

この事業の延長線上として、私は県外各地（おもに東北）に現存する、長州藩戊辰戦争戦没者の墓碑調査を8年かけて行った。数百の墓を古い記録を頼りに訪ね歩き、墓碑銘を筆写し、写真に撮った。その成果は平成九年に『防長戊辰掃苔録』として出版しているが、急きよまとめたため誤植が非常に多く、その後に調査漏れが判明したりで、十分ではない。資料は全て手元にあるので、いずれ完全なものを出版したいと思っている。

あまり重視されていないのかも知れないが、墓碑というのは意外と貴重な史料になることがあると感じている。まして史料に乏しい、無名の戦没者ならなおさらだ。しかし百年以上、風雪にさらされた墓碑は摩滅して銘の判読が困難なものも多い。一刻も早く記録することが必要ではないかと思う。

さて、県外の調査は一段落したので、次は県内の方である。こちらはまだ本腰が入っていないのだが、近年見つけた、墓碑調査の重要性と面白さを示す例を、身近なところで二つほど紹介しておこう。

ひとつは、慶応元年（一八六五）四月、八幡隊が創立した朝日山招魂場を前身とする朝日山護国神社（山口市秋穂二島）にある吉田稔磨^{しんま}の墓碑（霊標）。吉田稔磨（栄太郎）は萩の足軽で、吉田松陰の松下村塾で学び、秀才の誉れが高かった。しかし元治元年（一八六四）六月五日夜、京都三条の池田屋で新選組の襲撃を受け、没している。

その死に関しては、謎につつまれた部分が多い。新選組の包囲網を抜けた吉田は、注進の

ため一旦は河原町の長州藩邸まで逃れたらしい。ここで問題になるのは、藩邸の役人が屋敷の門を明けたか、あるいは巻き添えを恐れて明けたかなかったかということである。

新選組側の記録である西村兼文『新選組始末記』には、藩邸が門を閉じたままだったので、深手を負った吉田は「門前ニ自殺」したのだという。これは明けなかったという説。

ところが、長州藩側の記録である浦鞆負の手記要領（『修訂防長回天史』）によれば、一旦、藩邸に帰って変を報じた吉田は、再び槍を携えて外に出た。そして加賀藩邸の前で敵と闘って死んだという。これは、門を明けたという説である。そしてこちらの方が藩側の「公式発表」「公式記録」となってゆく。

明治三年十二月に吉田の父清内が藩に提出した『吉田稔磨存生中并死期之伝記』には、門を明けたが再び出て行き闘死した事になっている。さすがに遺族には、後の方の話が伝えられていたようだ。

さて、朝日山の吉田の墓碑だが、幕末の創建当時、八幡隊の同志が建立したものと思われる。正面には「吉田年麻呂神霊」、そして右側面にはこう刻まれている。

「元治元甲子六月五日於京師見殺」

墓碑銘中に強烈な「見殺」の二文字を見つけた時は、「ゾっ」とした。普通の常識では、死者の霊が眠る墓碑に刻む文句ではない。

残された同志たちが、そう刻まねばならない、何か事情があったことは確かであろう。それは、前述の藩邸の門を閉めたため、吉田が自殺せねばならなかったという記述と重なる気がする。

いまひとつは、吉敷郡秋穂町下村禅光寺に並んで建てられた、吉岡新太郎とマサの墓。吉岡は八幡隊（のち鋭武隊）の幹部の一人で、大田絵堂の戦い、小倉戦争など数々の戦いに参加して功績のあった、輝かしい維新の「功労者」である。

明治元年（慶応四年、一八六八）一月、戊辰戦争の際、吉岡は部下を引き連れ、大阪難波に駐屯し、警備にあたった。吉岡はこの地で、商家の娘マサと出会い、恋に落ちる。四月、命により吉岡らは秋穂に帰るが、マサはこれを追った。厳しい軍律と、萩の武家の養子という立場に苦しんだ吉岡は、六月九日昼前、秋穂西町の宿屋でマサと心中し果ててしまう。

秋穂の者たちは二人の悲恋を哀れみ、墓碑を建立した。吉岡の方は正面に「吉岡新太郎信義之墓」、右側面に「慶応四戊辰六月九日於于当地海浜旅舎死、享年二十六」と銘記。その



吉田稔磨墓（右）

隣に寄り添うように建つマサの墓には、正面に「浪花くろがねばし 山村おまさの墓」、右側面に「はるばるとたずね秋穂の浦浪に ともに散るとはあはれなりけり 有富猿石」と銘記されている。有富は秋穂の豪商で、尊攘運動の後援者でもあった。

また、秋穂には事件後、当時の関係者（吉岡の部下、宿の主人など）から聴取された記録も残っているという。

ところが、山口県文書館に残る藩側が作成した「公」の記録では、吉岡は五月に「除隊」し、六月に「病死」したことになっている。わざわざ除隊させ、関係を断ってから死なせているのを見ると、吉岡の名誉を重んじたというよりも、隊の、あるいは藩の名誉の方が優先されたようである。維新の「功劳者」が忠義のためならともかく、心中で死ぬなど、あってはならない事件だったに違いない。

真実は一とつしかない。にもかかわらず、真実ではない事が「公」の記録として残された場合、やり切れない者たちは、その思いを石に刻み付けるしかなかったのだ。こうした墓碑に巡り会うたび、私は調査、記録作りの必要性を痛感する。

「奇兵隊」がイベントや金儲けの「ネタ」にしか考えられない昨今の風潮からすれば、いつまで続けられるかは保証の限りではないが、谷館長の遺志ともいべきこの仕事は、出来るだけ続けてゆけたらと思っている。



吉岡新太郎とマサの墓



10年の永年勤続表彰を授賞して

山口県立山口博物館

専門学芸員 亀 谷 敦

宙ぶらりんとなった右足を降ろそうとするが降ろせない。体は斜めとなり不安定そのものだがまっすぐに体を起こせない。いつしか電車は大きく曲がりこのままでは倒れてしまうと何かつかまるものを探すうちに気がついた。どれだけ電車を揺さぶろうとも誰一人として倒れないほどギューギュー詰め状態であることを。「うー、苦しい。」と、その時やっと右足が地についた。山口では午前9時のもうとっくに通勤時間を過ぎているはずなのに、ここ松戸駅から乗り込む常磐線はすし詰め状態の満員電車であった。博物館に転勤して2年目（今から10年前）、学芸員の資格を持っていない私は、文部省の主催する学芸員講習に参加するため、松戸寮に泊まり込み約3週間（しかも2年がかりで）毎日このような状態で上野にある国立社会教育研修所に通ったのだった。

その松戸寮には、学芸講習会に参加の約半数の20名ぐらいが泊まっていた。東西に鉄筋コンクリート2階建ての2つの棟があり、その中央に昔食堂として使っていたという広間（ロビーと呼んでいた）があった。そのロビーでは夜になると当然のごとく酒盛りが始まった。それはまさに大学時代の学生寮の趣であった。大学と違うのは和気藹々の会話の中に各人の勤務している職場での立場なり置かれている状況が垣間見れることだった。ある日、博物館学の講師の先生が何気なく投げかけられた言葉に話が沸騰した。「博物館はもっとディズニerlandを見習うべきである。」「ドラクエはよくできている。人をひきつける。学ぶべき点が多いのでは。」というひと言だった。「どう思う。」に飛び交う感想、意見、思い。粛々と行われた講義であったがこれだけの反響があったとは驚いた。「テーマパークやアミューズメント施設をめざせとは講師はどうにかしている。」「楽しければいいのか。」という強い反論に始まり、「お客さんあつての施設であり、お客さんの満足を追求することは当然である。」との擁護の声、「そもそも各館のめざすものが違うので議論にならない。」の締めめの意見に落ち着くまで、各人の勤めている博物館施設の話、各人の施設への思いや願い、学芸員としての夢が熱く語られた。まだ学芸員にはなっていない者たちの会話であるが、各人の博物館のコンセプトやビジョンへの深いこだわりを感じた1日だった。

あれから10年。バブル経済の推移に平行するように博物館を取り巻く情勢も大きく変化した。90年代はじめ競って大型博物館の建設を行った関東一円でも、この数年で五島プラネタリウム、セゾン美術館などの超有名な施設が相次いで閉館、国立科学博物館は独立行政法人に変わってしまった。この変化はいずれ都会から地方へ波及することだろう。満員電車の中のように誰かが支えてくれる時代は去り、宙ぶらりんとなった足では立つことのできない時代になった気がする。永年勤続という表彰授与を機会にもう一度初心にもどり、10年間考えることを忘れていた「博物館のあるべき姿」を今度は学芸員として考えたい。

実物教育のすすめ

—いま小中学校との連携で博物館、美術館がやれること—

山口県立美術館学芸専門監

普及課長 安井 雄一郎

平成14年度から学校の完全週5日制がはじまる。小中学校への美術指導要領でうたわれた「鑑賞」教育の奨励はすでに完全実施期を終え、その成果をふまえたあらたな試行期間がはじまっている。こうした動きをうけて博物館、美術館がこれまで以上の役割をになうようになることはまず間違いないだろう。では、博物館、美術館はなにができるだろうか。私はいまの学校教育に博物館、美術館が提供し得るものの第一は、実物教育の機会をおいて他にない考えるので、そのことについて述べてみたい。

日本の学校教育には2つの大きな特徴があったと思う。1つは、国がみとめた統一教科書の使用、2つめは教科書中心の教育である。統一した教科書使用は、教育の地域格差や思想的かたよりを避ける上でも、また国家意識の醸成にも効率的だっただろう。また教科書中心の教育は、きめられた教科内容を一定年限でこなすためにはやむを得ざる効率的選択だったのだろう。

しかし、その結果として、統一教科書は画一的価値観を量産し、独創性をもつ個性が育ちにくい土壌の原因の1つとなってきた。のみならず例えば歴史の通史には通じていても自分の生まれ育った地域の歴史には疎い子がそだつという好ましからざる弊害も生まれた。教科書中心の教育がこうした傾向をさらに加速させ、五感のすべてに訴える学習本来のすがたを知識偏重というアンバランスな方向へと導いた。

こうしたこれまで幾度となく指摘されてきた教育の現状に対して博物館、美術館がなし得る1つが実物教育による教科書（知識）中心教育の補完である。

博物館、美術館が収蔵する「モノ」は、美術資料（美術作品）はもとより生活史（民俗）資料にせよ歴史資料にせよ、ほんらいそれ自体が人の想像力を触発し、挑発する何かを備えている。なぜなら人が生きた記録だからである。使われた道具、絵のタッチ、文書の筆圧だけでも、それらを手の跡としてのこした当事者に関する情報があふれている。実物教育の眼目は、「モノ」がもつこうした特性を利用した想像力の訓練にあり、こどもたち自らの想像力でモノを解釈させる自発性をそだてるところに解説で「モノ」を理解させる受け身の鑑賞教育との相違がある。

実物教育がいまなぜ必要かといえ、このような「モノ」との体験には、視覚はもとより触覚、聴覚など五感すべてのほど良い動員が必要とされるからである。ただ「モノ」をして語らしめるためには、体験する側に多少の訓練と忍耐がいる。「モノ」を用意するのはもちろんだが、その訓練のためのプログラムも、博物館、美術館が学校との連携のもと



美術における実物教育は、館藏品だけでなく特別展の機会も利用できる。（モネ展会場）

で具体化していかなければならないだろう。

冒頭の指導要領にもどると、学校での鑑賞教育の重視は、美術教育などにかろうじて残された手仕事の領域が以前にもまして学校教育から減少することを意味する。以前には家庭にあった「手伝い」という名の手仕事さえも、今では死語にちかい。手を使うことで得られる触覚の開発、怪我の痛さ、肌ざわり等々。デスクワークでは蓄積できないこうした経験の場はいよいよ少なくなってきている。

それだけでなく電子情報がいきかい、イメージだけがコミュニケーションの道具になってきつつあるデジタルな世の中である。レオナルドは五感のうち最も高級な感覚器官は「視覚」だとして、触覚にたよる彫刻よりも視覚にもとづく絵画のほうがより上位にあると説いた。それから500年後の世の中は、その「視覚」万能の世界になった。こうした環境にあって五感の回復にすこしでも寄与できる実物教育がいまこそ必要な理由が、そこにもあると考える。

実物教育をふくめ、五感回復の総合的教育の可能性を学校との連携のもと模索して行かなくてはならないと思う。



絵画による実物教育。解説の助けなしでとにかくみること、つぎにみたもの、気付いたものについて言葉にしてみるものが、実物教育の第一歩である。(モネ展会場から)

ジュニアサイエンスクルーズに参加して

防府市青少年科学館

副館長 木村 雅 幸

2001年8月26日の日曜日、午後9時44分、JR防府駅で一緒に参加した子供達の家族や私の職場の仲間達の出迎えを受け、子供達との9日間の旅が終わりました。

私は、子供達の親の笑顔を見た時、ほっとして、肩の荷を下ろした気分になり、同時に満足感を覚えました。子供達の方は、楽しかった旅の終わりを惜しんでいるかのようでした。不思議に疲労感はなく、子供達との旅の出来事が思い出されました。

このジュニアサイエンスクルーズは、小学5年生から中学2年生までの子供達8人とリーダー1人を1班とする30班からなり、子供達だけで240人ほど、リーダー、スタッフ等を併せると300人を超えていました。さらに行きは船、帰りは飛行機のエメラルドグループと反対に行きは飛行機、帰りは船のスカイグループと二つのグループがあり、総勢600人余りがこの企画に参加しました。

行き先はグアム島で、そこでは様々な行事により交流を図り、豪華客船ふじ丸では、船に関することや科学に関する実験等のプログラムがありました。

こどもゆめ基金を使ったこの企画は、第一回目のジュニアサイエンスクルーズということで、試行錯誤の部分もあり、スタッフ、リーダーのミーティングでは、現地の状況や子供達の様子の変化から毎回、指示内容が修正され、みんな一所懸命でありました。

ジュニアサイエンスクルーズについては、当館の佐伯館長が是非、参加してみようという意向のもと4月から準備を始めました。各団体での募集方法はまちまちであったらしく、防府市青少年科学館では、この4月に当館に発足したばかりの少年少女発明クラブの会員を中心に班を作りました。

5月末には参加メンバーも決まり、7月にはパスポートの申請を済ませ、リーダー、スタッフ研修が済んだところで、参加者の顔合わせを兼ねた研修会を行ないました。8月18日午後1時、JR防府駅に集まった子供達は、私を含めて緊張気味であったので、なんとか雰囲気のをらげようと参加者の一人一人に“ヨロシク”と言って握手をしました。7月に一回顔を合わせただけにわかグループであり、気心も性格もわからない子供達を引率して、9日間も面倒みなくてはならないと思うと多少不安でもありました。佐伯館長の挨拶も済み、それぞれの家族に見送られて、私達9人は大きな荷物を持って関西空港へ向かいました。関西空港では、ホテル日航が集合場所になっており、そこで旅行や荷物の手続きを済ませてから、結団式に望みました。会場でバディを組むことになる千葉県のガールスカウトのメンバーと出会ったので、まずは仲良くなることが大事と思い、一緒に記念写真を撮りました。

午後11時20分発のグアム行きのジャンボ機に乗り、翌日午前2時30分には、グアム島の空港に着陸しました。入国手続きを済ませ、子供達は眠い眼をこす



ふじ丸スポーツデッキにて

りながらバスに乗り、パレスホテルへ着くとベッドで眠りました。

グアム島での活動は、潜水艦に乗って深度30メートルの海を眺めたり、グアム大学の体育館でグアムの子供達とスポーツレクリエーションを行ったり、グアム島の子供達とホテルで立食パーティによる交歓会を行ったりしました。また、自主研修時には、子供達にホテルの近くのスーパーで買い物をさせたり、家族に手紙を書かせたり、プールで遊ばせたりしました。グアム島で特に子供達の思い出に残ったのは、スターサンドプライベートビーチで泳いだことやその後、暗くなってからビーチで食べた豚の丸焼きなどの食事やグアムの人たちが演じたファイヤードダンスであったろうと思います。



潜水艦から熱帯魚を見る子ども達

グアム島には4日間滞在し、8月22日にはバスでチャモロ文化村やトロピカルフルーツワールドを見て回り、豪華客船ふじ丸に乗船しました。5日間の船の旅が始まり、これからがサイエンスクルーズの始まりだと思いました。太平洋は、静かだといっても少しはうねりがあって、船酔いの子供達がたくさん出てきました。私も乗船した日と翌日は、食欲がありませんでした。当初は60人あまりの船酔いが出たらしいのですが3日目には10人ぐらいに減ったように聞いたので、私も含め、少しは船に慣れたきたのかなと思いました。船酔いで、ふじ丸特製の美味しい料理が食べられない時は、ずいぶん損をしたような気がしました。横揺れはまったく感じられませんでした。縦揺れは船尾よりも船首の方が強くて、立っていると膝に体重がかかり、不快でした。船内プログラムでは「明日の天気を予想してみよう」に参加し、アシスタントとして3日間、サイレンスレンジャーの古田先生のお手伝いをしました。天気は空気と水が起こす現象だということから真空ポンプでドラム缶の空気を抜く実験を行ない、「ボカン」という突然の大きな音に子供達と一緒にビックリしました。トリチェリーの実験では、10メートル以上の高さが必要なため、水の入ったホースと巻尺を持って1階から6階まで、船の揺れのため膝にかかる体重をこらえながら階段を何度も上がり下りをしました。また、特殊なガラス容器から空気を抜いて、真空状態にしてガラス容器内の風船や温度がどのように変化するかとか、空気が少なくなるにつれてガラス容器内を回転する飛行機がしだいに止まっていく様子等を観察したりしました。その中で、船の揺れのため微妙な計測が必要なものは実験できないものもありました。また、天気の情報を知るということでふじ丸の操舵室の海図や計測器等の説明を一等航海士から受けました。ふじ丸の船内では船内プログラムだけでなくほかの催しものもあり、子供達の特に思い出になったのは、ジュニアサイエンスまつりであったろうと思います。バディを組んだ千葉県のガールスカウトと一緒に演じたファイヤードダンスを真似た踊りが可愛かったのか審査員から特別賞をもらうことができたからです。

男の子6人とは、部屋の中で接する機会が多かったので日ごとに気心がわかってきましたが、女の子2人はバディを組んだ千葉県のガールスカウトのリーダーに面倒をみてもらったため助かった反面、あまり話す機会が少なくなってしまいました。

ふじ丸は、8月26日午前9時30分、東京晴海ふ頭に接岸しました。いろいろなことがありましたが、グアムの海と太平洋の海原と子供達との9日間を忘れることはないだろうと思います。

日本ハワイ移民資料館

会員の皆様方には猛暑の夏をいかがお過ごしになりましたか。朝夕は秋風を予感させる涼風が肌に感じられる昨今、やっと夏を乗り切ったなという想いがいたします。

さて、平成13年度から従来お世話になっておりました「大島町歴史民俗資料館」に代わりまして入会させていただきました「日本ハワイ移民資料館」です。どうぞよろしくお願ひいたします。

大島郡は、明治、大正の時代、日本人がハワイへ移民として海を渡った時期特に多くの渡航者を出し「移民の島」と知られました。彼等の凄まじい開拓魂や愛郷心はそれぞれの故郷への文化経済において多くの貢献を成し、現在へと受け継がれています。

しかし、世代を追うに従いかつての故郷との絆が失われようとしていることを非常に残念に感じています。



堅固な石垣にそびえる日本ハワイ移民資料館



大王松の大樹から資料館家屋の歴史が見える

大島町では海外に雄飛して行った郷土の先人たちの歴史を後世に残すとともに故郷との絆の回復と新たなる国際交流に寄与することを願ひ、第1回の官約移民がハワイに到着した日を記念して1999年2月8日に「日本ハワイ移民資料館」をオープンいたしました。

当館は、移民の成功者が帰国し残した家屋を利用することで家屋自体を移民の象徴する展示品となっています。

その他、日系人3～5世以降の方々のルーツを探る資料として外交資料館の御協力を得て官約移民約3万人のデータの検索システムを設置したり、インターネットでの米国、ハワイに在る姉妹提携5館との相互情報交換及び全国への発信が出来るようホームページの立ち上げを昨年度完成させました。

その集大成として今年「山口きらら博」の国際交流館に出展し多くの方々から共感を得ております。

本来の博物館とは多少異質なところはありますが資料館としての使命感は十二分持っておりまして、今までの歴史民俗資料館同様ご愛顧のほどよろしくお願ひいたします。

博物館協会の発展とご清栄を祈念し、会員の皆様にも是非一度は御足をお運びいただきますようご案内申し上げ末尾といたします。



玄関つい立てから受付、売店を見る



アメリカ帰りの想いが伝わる洋式台所



海外生活で持ち帰った当時の衣類等

市立しものせき水族館・海響館

2001年4月、山口県下関市に市立しものせき水族館・海響館がオープンしました。

これまでの市立下関水族館は、長府の外浦海岸に昭和31年、当時としては東洋一の規模として開館し、海響館が完成間近の平成12年12月、その歴史に幕を降ろしました。そして、21世紀にオープンする最初的水族館として、下関市の中心街、下関駅と唐戸地区を結ぶ新たな賑わいの空間「あるかぼーと」に市立しものせき水族館・海響館として生まれ変わったのです。海響館は、下関の歴史が海と深く関わってきたことから、「海のいのち・海といのち」を展示概念として展開されています。水の中で生活する生きものたちの生態を通じ、生命のすばらしさ、自然と人間の関わり合い、そして自然の保全や保護などの大切さについての理解を深めるものです。当施設は、海の自然誌を体験しながら学習する21世紀の水族館として、地域間、多世代の交流の拠点を目指しています。

海響館では、400種15000点の生きものたちを65槽の水槽で紹介しています。また、目の前に広がる関門海峡の景観を取り入れた関門海峡潮流水槽（約900t）は、下関を取り囲む3つの海、日本海（響灘）・関門海峡・瀬戸内海（周防灘）に分けられ、それぞれに住む生きものたちの生態を展示しています。



関門海峡水槽

そのほかにも、関門海峡部分では、海峡で起こる海流の現象、潮流と渦を再現しています（渦を再現した水槽は、世界初の試みです）。また、瀬戸内海部分では、関門トンネルをイメージしたトンネル水槽となっており、まるで海の中に浮遊しているような感覚を与えています。そして日本海部分では、その荒波を再現するために波ボールによる造波と海中での水底動揺装置による海底の波紋形成を再現しています。このように、それぞれの海の特徴を演出する一方で、水槽を取り巻く擬岩には、下関の特産である赤間石の層を表現し、現地で型取りした擬岩と彦島の二枚貝の化石（シシユウタマキガイ）やカキの化石を組み合わせるなど、地域型水族館として徹底した演出を行っています。

このほかにも世界中のフグの仲間を紹介するコーナーや、下関周辺の自然を紹介したコーナーなど下関にちなんだ展示を通して、自然を体感できる施設となっています。また、関門海峡をバックにしたアクアシアターでは、イルカやアシカたちのすばらしい生態をご覧頂けます。そして、世界でも数例しかないシロナガスクジラの全身骨格標本を展示しています。もちろん日本で唯一の展示であり、その巨大な姿は、圧巻です。この骨格標本は、1886年に北大西洋で捕獲された体長約26mのシロナガスクジラです。

ノルウェーのトロムソ大学・トロムソ博物館で115年間保管されていたもので、このたびシロナガスクジラを研究するために借用したものです。

市立下関水族館の44年間の歴史をふまえ、そして21世紀の斬新な水族館に生まれ変わった「海響館」に、ぜひお越し下さい。



海より全景

自由奔放・海響館のバンドウイルカたち

市立しものせき水族館「海響館」

企画開発課長 和田 政 士

海響館のアクアシアターでは、バンドウイルカの生態展示そしてカリフォルニアアシカやオタリアの生態展示を1日各4ステージづつ行っています。この「ステージ」は、お客様からはイルカやアシカのショーと認識されていますが、海響館では、生態展示として紹介しています。

さて、当館のステージのスタイルですが、飼育トレーナーとイルカとのゲーム（遊び）をそのまま演出に取り入れて皆様に御覧いただいております、実際にイルカが自ら始めたいろいろな行動（パフォーマンス）をそのままステージに取り入れている場合がたくさんあります。実は、このようなイルカたちのパフォーマンスは、私たちから見るとオリンピック選手レベルに思えますが、イルカにとっては、「困難」・「難しい」などというレベルではなく、たとえば、小学校中高学年の体育演技レベル、つまりどのイルカでも遊びとして実現可能なレベルなのです。そしてステージは、イルカにとって有り余る力を発散する場となっているようです。本来、出演予定ではないイルカはその時間だけ、ステージプールからサブプールに移動するのですが、出演したくてなかなかサブプールに移ってくれないイルカがいたりしてトレーナーが困り果てることもしばしばあります。また、すべてのステージが終わった後でもイルカたちはジャンプを繰り返したり、陸上部に上がってきては、くるくると回転したり、トレーナーとの接触を求めてきたりと元気一杯なところを見せてくれており、実のところは、イルカたちよりも彼らと付き合う飼育トレーナーの方がヘトヘトになっている状態なのです。

このような当館のトレーニングの方法は、海獣展示課長のエーブル課長の指導によるもので、従来の日本の方法とは少し違います。動物とのコミュニケーションを自然界でと同じようにとることがもっとも重要であるという考えのもとに行っており、可能な限りの時間をイルカとの接触、遊びに費やしながらい、イルカの行動を観察し、イルカたちの行動を引き伸ばしていくものです。結果として人間とイルカとの距離がイルカ主導型のものであると感じています。

以上のように、イルカたちが繰り返し広げるすばらしいジャンプなどの行動は、イルカたちの普段の行動・何気ない動きをお見せしているだけにすぎません。海響館では、飼育トレーナーとイルカとの遊びの中で、イルカのいろいろな行動を見つけられています。そのためか、海響館のイルカたちはとても遊び好きで、お客様ともガラス越しに良くコミュニケーションをとって遊んでいます。夏期間には、トレーナーも水中に入り、プールの中でイルカたちと楽しみながらの新たなパフォーマンスをご覧いただきました。手前味噌ではありますが、海響館のイルカたちは健康で、輝く瞳を持ち、のびのびとしていると自負しています。皆様も海響館で、バンドウイルカたちとトレーナーとの息のあった妙技をお楽しみいただきながら、バンドウイルカたちとコミュニケーションをとってみませんか？



三周年を迎えて

石城の里 三国志城

館長 小山 正 典

今年、梅雨明けが思いの外遅かった。特に山口県地方は、梅雨らしい雨の日が少なく7月上旬には梅雨明けかと思われるような猛暑が続いた。梅雨明け後も猛暑続きで、水瓶が気になり始めた。でも農家にとっては豊作に拍車がかかる天候である。

『石城の里三国志城』は、全国の根強い三国志ファンに支えられて、9月には開館3周年を迎える。オープンが平成10年、経済不況の真っ直中であった。以来、「やや好転」と言う予報も何度かあったが、直ぐに「やや陰り」・「更に悪化」の予報に変わっていった。経済不況の梅雨は未だに明けようとしなない。零細企業にとっては、まさに正念場である。

時恰も「山口きらら博」の最中で、初日から二十日間で五十万人の入場者があったと報道された。大規模なイベントでないと集客力が得られないのだろうか、うらやましくも思うが県民の一員として「きらら博」の成功を心から願うものの一人である。有り難いことに、最近他県ナンバーの家族連れの入館者にたづねると、その殆どが

「きらら博の帰りなんですよ！」

とおっしゃる。

「三国志の資料館が大和町に出来たと言うことは早くから知っていて、是非見に行こうと思っていたけれど、きらら博のお陰で実現いたしました。」…と。

嬉しいですね。こんなに遠く離れた所まで、わざわざ立ち寄っていただけるんですから…。周年記念として毎年夏休み期間中に行っている『三国志クイズラリー』の難問を、家族が手分けをして回答探しをしている情景は、何とも微笑ましい限りである。つつい職員も

「ボク！その答えは〇〇にあるよ！」

と言ってしまふ。そうすることによって異国の文化が少しでも理解して貰えれば幸いである。帰られるとき

「有り難うございました。気をつけてお帰り下さい。」

と言うと

「こちらこそ、いろいろと有り難うございます。もう少し勉強して、またきつと寄らせていただきます！」

と言う返事が返ってくる。お客様相手の仕事に携わっているものにとって、この上ない喜びを感じる時である。

『温故知新』という言葉がある。劉備・曹操・孫権が、そして孔明・司馬懿・周瑜達が戦乱の嵐の中で国盗り物語を演じ、国と国・人と人が葛藤を繰り広げた三国時代から、約1,800年の時空を越えた今日



木牛（もくぎゅう）

まで、当時の粋を集めた科学技術や文化は脈々と受け継がれており、更に我が国の文化の礎は、大陸文化にあることが良く理解できる。歴史をひもとく楽しさ・面白さはこんな所にあるのかも知れない。

今年の夏、富山県から飛行機を乗り継いでやって来たという三国志ファンは、三国志が大好きで、関係するいろんな本をむさぼり読んだという。その中で、どうしてもイメージが湧いて来ないものに、孔明が栈道（長江河岸の崖に架けられた道のこと）を利用して食料や武器を運搬するために考案したと言われる『木牛』（一輪車）と『流馬』（四輪車）があったという。よほど嬉しかったのであろう。彼は展示場からでてくるなり

『富山からわざわざ山口へ来た甲斐がありました。もやもやしていた木牛・流馬の実物に逢うことが出来ました。』と興奮気味に語ってくれた。六十代以上の方なら記憶があると思うが、木製の「ネコ車」の原型が、千八百年前に孔明が考案した木牛にあったというのである。

不況続きで決して経営は楽ではないが、来場者からこんな話を聞くと、三国志城の創設者谷千寿子女史は

『町おこしに何をしようかと悩んだけれど、三国志の資料館にしてほんとうによかったね。』と目を細めて語る。

何はともあれ、不況梅雨が早く上がってくれることを切望する三周年である。



流馬（りゅうま）



「戦没画学生『祈りの絵』展」の開催に向けて

徳山市美術博物館

学芸員 赤松 祐樹

徳山市美術博物館では、平成13年11月9日から12月9日までの会期で「戦没画学生『祈りの絵』展」を開催いたします。本展は、長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」所蔵の作品とともに、徳山ゆかりの戦没画学生松岡俊彦、原田新、久保克彦の作品をとおして、苦難な時代にありながらも制作を続け、志半ばにして戦火に散った彼らの生き様を紹介し、戦時期の周南地域出身の画家の創作活動の一端をあらためて捉え直そうとするものです。

戦争をいかに捉え、記憶していくか、そしてその記憶を後世に残し、いかにあらわしていくかということは大きな問題としてあります。そこには事実とその後の評価とのあいだの質の違いが大きく立ちはだかります。しかし過去の傷それ自体は決して癒されることがありません。



久保克彦「図案対象」5枚組のうち中央画面
東京芸術大学大学美術館蔵



松岡俊彦「自画像」
光市文化センター蔵

それを癒されたもの

として忘却したり、さらには、本来は生き生きした、強い「思い」であったものを、閉じられた空間のなかへ、既に終わったものとして封じ込めることは、ある種の暴力であるといえるでしょう。しかし展覧会とは、それらを固定し、さらに素材にして歴史を提示することでもあり、そこでの葛藤は現場に関わるものにとっては、諸々の書物をひもとくまでもなく自明のことと思います。

展示に携わる学芸員としての、さらには公共の文化施設としての「責任」とはどのようなものなのか、誰が引き受けるのか。そ

のようなことを自問しながら、押し寄せる雑務と格闘しつつ、展覧会開催に向けて準備を進めています。本展がそれぞれの鑑賞者が記憶を受け継ぎ、自身で考え続けていく一助になればと願っています。



原田新「八代の鶴」 個人蔵